

2023 TOEIC® セミナー 報告書

今、実社会で求められる英語力とは
～多様化する英語ニーズと自分の英語力を知る意義～

2023年9月13日(水)

今、実社会で求められる英語力とは ～多様化する英語ニーズと自分の英語力を知る意義～

2023年9月13日(水) オンライン開催

基調講演 1

プロジェクト発信型英語プログラム

生き残るか、取り残されるか

—生成系 AIを組み込んだ大学英語教育の最前線—

立命館大学 生命科学部 教授 山中 司 氏

立命館大学 生命科学部 教授 木村 修平 氏

事例発表 ① 長野県立大学 9

「英語集中プログラム」による英語力強化の取り組みと

TOEIC® L&R の活用

長野県立大学 グローバルマネジメント学部 グローバルマネジメント学科 教授 坂 淳一 氏

事例発表 ② ヤマト運輸株式会社 15

ヤマト運輸における自己研鑽の取り組みのご紹介

ヤマト運輸株式会社 人材開発部 営業・グローバル人材担当チーム マネージャー 片見 香里 氏

プロジェクト発信型英語プログラム 生き残るか、取り残されるか —生成系AIを組み込んだ大学英語教育の最前線—

立命館大学

生命科学部 教授

山中 司 氏

生命科学部 教授

木村 修平 氏



山中 司 氏



木村 修平 氏

■ 関西に拠点を置く大規模私立大学

本学は関西に拠点を置く、大規模私立大学の一つです。現在、16学部、22の研究科があり、合わせて約3万7,000名の大学生・大学院生が在籍しています。主なキャンパスの所在は京都市と滋賀県草津市、大阪府茨木市で、生命科学部は滋賀県草津市にある、びわこ・くさつキャンパス、通称BKCにあります。

■ ICTをフル活用したプロジェクト発信型英語プログラム

本学の16学部のうち、生命科学部を含む4学部で展開している英語プログラムに「プロジェクト発信型英語プログラム」があります(資料1)。英語で言うとProject-based English Program、略してPEPという通称で呼んでいます。

このPEPの授業では、教科書というものが基本的になく、各学生が自分自身の興味や関心に基づいてプロジェクトを立ち上げ、その進捗や成果を論文などのアカデミックなフォーマットを用いて英語で発表しています。この各学生が立ち上げるプロジェクトの内容は原則、公序良俗に反していなければ自由に設定できます。


PEPの特徴として、こうした自由度の高さに加え、ICTのフル活用も挙げられます。後ほど詳しく説明しますが、PEPでは、ICTと相関や親和性の高い「新たな4技

能」というものを見出しています。また、TOEIC® Listening & Reading Test(以下、TOEIC L&R)団体特別受験制度(IP:Institutional Program、以下IPテスト)を2008年度の生命科学部と薬学部の同時開設時から途切れることなく採用し続けています。


(資料1)

プロジェクト発信型英語プログラム(PEP)

- Project-based English Program (PEP)
 - 立命館大学 生命科学部・薬学部(2008年～)
 - スポーツ健康科学部(2010年～)
 - 総合心理学部(2016年～)
- 学生が、自分自身の興味・関心に基づいて「プロジェクト」を立ち上げ、その成果を英語&アカデミックフォーマットで発表
- 事実上のBYOD体制を2008年から実施
- ICTをフル活用した発信型英語教育
- コロナ禍でも高い満足度をキープ



詳しくは↑



PEP

■ TOEIC® Programは実社会におけるデファクトスタンダード

TOEIC L&Rを継続し続ける理由としては、資料2にまとめた通りです。スコアと現場の教員が実感している各学生の英語力はほぼ一致しており、高いスコア精度と信頼性があります。

課題解決型学習といった探究型の教育では、評価が主観に偏ることが多く、客観的指標であるTOEIC L&Rのスコアは、評価の根拠資料として非常に重要性を持っていると考えています。

また、TOEIC® Programは実社会における英語能力を計測する、あるいは示すデファクトスタンダードであることも理由の一つです。就職や大学院進学、転職の場において、TOEIC L&Rのスコアが有利に働く場面は少なくありません。

大学のIPテストは現在、オンライン方式を導入していますが、非常に利便性が高いです。実施コストもマークシート方式と比べて大幅に下げることができました。このほかにも、PEPではTOEIC L&Rのスコアを解析して、レポートを生成するオートメーションのウェブアプリを開発するなど、TOEIC Programに大きな信頼を寄せています。

(資料2)

TOEIC L&R IPテストを選び続ける理由

- 2008年度より生命科学部・薬学部で導入、以来15年間継続
 - スコアの精度・信頼性の高さ
 - 教室での実感とほぼ一致
 - 客観的指標として学内外に提示できる
 - PBL・探究型では特に貴重
- 実社会のデファクトスタンダード
 - 就職・大学院進学など進路と連動
- オンライン化したIPの利便性
 - 試験実施コストの大幅削減

※1. 2019年度 学科別スコア比較表

人数	平均スコア	標準偏差	最上スコア	最下スコア	前年平均スコア	
生命科学部	68	505.41	118.78	185	885	488.75
薬学部	88	427.71	108.84	278	888	482.71
生命科学部	88	488.75	121.38	305	900	488.45
生命科学部	88	554.12	127.80	220	900	641.82
学部全体	315	521.75	102.76	185	900	591.45

PEP独自のTOEIC L&R IPテストスコア分析&レポート生成Webアプリ

生命科学部と薬学部の開設時から15年間TOEIC L&R IPテストを継続している中で、スコアを経年的に示したものが資料3になります。

注目してもらいたいのが、15年前の2008年度新入生の平均スコアが生命科学部では392.9点、薬学部では407.3点でしたが、2023年度新入生の平均スコアは生命科学部で461.3点、薬学部で479.8点といずれも約70点も上昇しています。

(資料3)

TOEIC L&R IPテストスコア変遷から見えること(前編)

- 学部開設時より15年間TOEIC L&R IPテストを継続実施
 - 詳細データはこちら
- 2008年度新入生平均
 - 生命：392.9
 - 薬学：407.3
- 2023年度新入生平均
 - 生命：461.3(△70)
 - 薬学：479.8(△72)

学部・学科	入学時(15年前)	15年前	10年前	5年前	2023年度	2022年度	2021年度	2020年度	2019年度
2008年度(オンライン)	生命科学部全体	481.3							
	生命科学部	456.7							
	生物工学科	470.9							
	生命薬学専攻	447.5							
	生命科学部	474.8							
	薬学部	495.4							
	生命科学部全体	454.0							
	生命科学部	474.8	591.4	521.7					
	生物工学科	484.0	488.8	530.4					
	生命薬学専攻	466.0	482.7	527.7					
	生命科学部	448.0	498.5	438.8					
	生命科学部	466.0	547.8	506.1					
	生命科学部	488.8	438.5	541.2					
	薬学部	516.2	534.3	589.0					
	生命科学部	495.0	481.8	527.8					
	生命科学部全体	459.8	487.8	489.8	817.6	862.0			
	生命科学部	448.6	498.8	487.6	828.1	865.0			
	生物工学科	475.1	508.4	526.8	828.8	889.1			
	生命薬学専攻	426.2	464.2	488.7	488.8	517.8			
	生命科学部	471.2	532.8	508.8	867.7	883.5			
	生命科学部	488.8	617.8	622.1	848.8	884.4			
	薬学部	495.1	514.1	535.0	832.1	818.9			
	生命科学部	475.2	621.1	643.3	842.0	858.4			
	生命科学部全体	471.2	644.4	638.8	818.8	824.8	834.8	838.1	
	生命科学部	448.6	478.0	488.1	481.8	512.7	512.0	527.2	
	生物工学科	564.1	530.8	645.8	638.7	638.6	638.6	624.8	
	生命科学部	607.0	522.2	532.3	645.4	638.8	641.0	627.2	
	生命科学部	482.0	562.3	498.4	626.4	624.4	624.4	626.1	
	生命科学部	616.4	611.7	611.8	642.4	631.0	638.2	638.2	
	薬学部	634.1	613.8	629.0	648.2	628.4	627.2	627.2	
	生命科学部	500.0	508.0	491.1	526.1	614.4	622.2	622.2	

入学時点での新入生の英語力は15年前と現在を比べて高まっているというのは、教室で教えている教員も実感していることですが、その英語力の初期値が上がった理由としては、中学校、高校での計6年の英語教育が実を結んだからではないかと考えています。

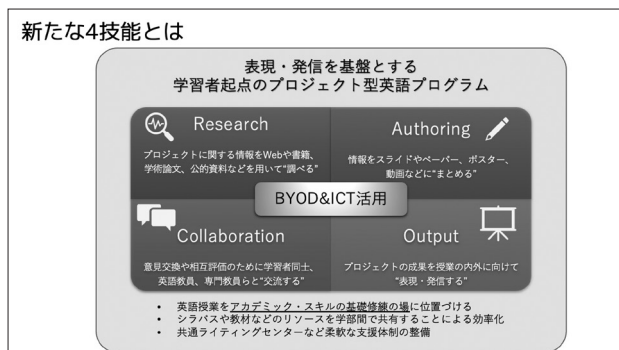
■ ICTと不可分である新たな4技能を設定

先ほど少し触れましたが、PEPで位置付けている「新たな4技能」について紹介します。

4技能と言えば「聞く・読む・話す・書く」ですが、PEPでは言語活動をより多様性のある、より複雑なものとして捉え、個々の英語力を純粋に計測する上で必要な新たな4技能として「Research・Authoring・Collaboration・Output」を見出しました(資料4)。

「Research」は、プロジェクトに関連する情報を様々な手段で調べる。「Authoring」は、その調べた情報をスライドやペーパー、ポスターや動画など何らかの形でまとめる。「Collaboration」は、まとめた情報を基に意見交換したり、相互評価し合ったり、交流する。最後の「Output」は、プロジェクトの進捗や成果を発信、表現するというものです。これらが新たな4技能として定義できるのではないかと考えています。

(資料4)



そして、この新たな4技能は今日、ICTの活用抜きには語れません。様々なデジタルスキルやオンラインサービスなどと密接に結びついています。具体的には、Researchについてはインターネット検索をはじめ、図書館のデータベースで蔵書を探す、文献を調べる、自らアンケートをとる、調査することも含まれますし、近年では機械翻訳という手段もあります。ニューラル機械翻訳と呼ばれる翻訳手法は、望んだ英文を算出するためにResearchと捉えることができます。

Authoringは、情報をまとめていくには文書作成編集ソフトや表計算、スライド作成ソフトを使ったり、動画やクリエイティブデザイン系のツールを使ったりします。あるいは企業内のデータを見える化して、経営判断や売上目標などの意思決定を助けてくれるビジネスインテリジェンスツールなどの活用もAuthoringに含まれてくるでしょう。

Collaborationについては、大学という教育現場での交流の場は一般的に学習管理システム(LMS)が主でしたが、コロナ禍を経てビデオ会議システムやチャット型のグループウェアも普及しましたし、最近ではVR空間も交流の場所として広がりつつあります。

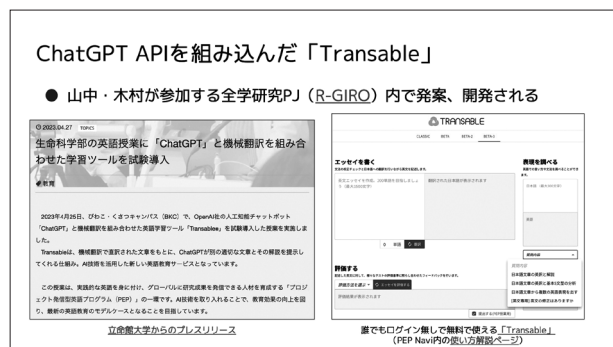
Outputは、紙に印刷することはもちろん、メディアへの外部出力、特定の形式で発信し、評価を受けることも含まれますし、大規模会場でのプレゼンテーションやポスター発表も想定されます。コロナ禍で現実の場所に参加者を集めることが難しかった時にPEPでは、VR空間でポスター発表を行いました。

このように新たな4技能がICTと不可分に結びついていると捉えていることから、PEPが対話型AI

「ChatGPT」をはじめとする生成系AIを公開直後から積極的に活用する方向にかじを切ったのは必然でした。

積極的に活用している事例として、複数の生成系AIサービスのAPIを組み込んだ「Transable」という本学発の英語学習ツールがあります(資料5)。これは大学内部のR-GIROという全学研究プロジェクトで発案・開発されたアプリで、機械翻訳で直訳された文章をもとに、ChatGPTが適切な文章や解説などを提示してくれます。ちょうどChatGPTが話題になり始めたタイミングとTransableの公開が重なり、数えきれないほどメディアからの取材や他大学からのヒアリングが殺到し、大きな反響がありました。

(資料5)



■ 生成系AI時代の英語教育はどうなるか

こうしたメディアの取材で幾度となく尋ねられたのが、果たして生成系AI時代に英語教育とはどうあるべきなのか、将来何が起こっていくのか、ということでした。生成系AIを英語教育で意図的に使ってみて感じてきたことを4つお話ししたいと思います。

1点目は生成系AIは、ある種のシンギュラリティを迎えたということです。例えば文書作成ソフトのスペルチェックの機能はすごく便利で広く活用されていると思います。ICTと英語教育の親和性は高いとはいえ、いきなり英語教育に機械翻訳を入れるとなると賛同しかねるという人もいるのではないのでしょうか。

機械翻訳は、かつて精度が低く使い物になりませんでした。今では英語母語話者レベルの巧みな表現の

英文を算出しています。もちろん誤訳は今でも一部ありますが、なくなるのは時間の問題でしょう。つまり、機械翻訳によって私たちの能力を超える出力が可能になってしまいました。そうした中で、英語教育に機械翻訳を導入する是非という議論が巻き起こることは当然です。それだけ機械翻訳や生成系AIが非常に大きな質的な転換を迎えたということです。

2点目はAIとの共存についてです。生成系AIの導入について、立命館大学も含め様々な教育機関が声明を出していますが、社会としては受け入れて活用していく方向に傾いているというのも事実です。

ChatGPT公開直後の2023年1月にニューヨーク市が公教育におけるChatGPTの使用禁止を宣言しました。ところが4カ月後の2023年5月には禁止を撤回しました。当時のニュースでは禁止撤回の理由について、教育行政の立場のある人のコメントとして「学生が生成AIを理解することが将来重要になるという現実を見逃していた」と紹介していました。

同様に日本でも2023年7月に文部科学省から「大学・高専における生成AIの教学面での取扱いについて」という方針が出ています。この中に「生成AIは、今後さらに発展し社会で当たり前に使われるようになることが想定されるという視座に立ち、生成AIの原理への理解、生成AIへのプロンプト（質問・作業指示）に関する工夫やそれによる出力の検証、生成AIの技術的限界の体験等により、生成AIを使いこなすという観点を教育活動に取り入れることも考えられる」という非常に象徴的なことが書いてあります。

これらのポイントはAIを使ったことがない学生が社会に出て、AIの時代についていけないということが想定される中で、教育機関としても生成系AIの導入を無視することはできないということです。次世代の人たちがAIを使いこなせるようにして、AIと共存していくという時代の潮流があると感じています。

3点目は英語教育に特化した場合での母語活用の復権です。例えば、イギリスの理髪店で「全体的に髪を2センチぐらい切ってくれませんか」と英語で伝えることができない日本人は多いと思います。これは勉強不足

だとか言語的なセンスがないといった理由からではなく、ほとんどの日本人にとって英語が母語ではないからです。同様に、中国人留学生は日本と同じ漢字文化圏ですし、日本語を学ぶ上で有利だと思いますが、それでも日本語の「てにをは」を難しいと言います。

母語とは別の言語で母語話者レベルになるということはかなり難しいことですが、生成系AIを使えば簡単に母語話者に比肩することが可能です。なぜなら基本的に生成系AIが使う言語全集は、母語話者の書き言葉を収集・構造化したものだからです。

しかも機械翻訳は、その人が一番得意な母語の感覚を込めて他言語に出力することが可能なため、非常に質の高い翻訳と言えます。ただ、母語感覚が生きる機械翻訳をどのように英語教育に落とし込むかということ、その教授法は未整備ですし、教授経験は絶対的に不足しています。なぜかと言うと、日本の英語教育は、日本語を介在した文法訳読式のようなものから、英語の授業を英語で行うオールイングリッシュが偏重されるようになっており、母語感覚を生かした英語教授のノウハウは失われてしまっているからです。この部分はPEPでも手探りですが、これまで見向きもされなかったような翻訳学的な英語教育への接近が今、急速になされつつあるというのは英語教育にとってインパクトになると思っています。

英語教育で生成系AIを使って感じるものの最後は、テストの未来についてです。先に答えを言うと英語のテストはなくなると考えています。

例えば海外の人と交流したいなど、英語を使ってやりたいことが人それぞれあるかと思います。このゴールにたどり着こうと、地道な努力を積み重ねて英語力を高めるわけですが、これからは生成系AIを使うことで最もやりたいことを一気に実現させることができます。機械翻訳の出力する英語に助けをもらいながら、やりたいことを実現させてモチベーションを保ちつつ、自分の英語力も高めるという過去にない英語学習が今後可能になっていくと思います。それでも、自分自身の英語力と、機械翻訳が出力する英語力の差はあるため、その開きを縮めていくということが、今後の英語教育の

あり方になるのではないのでしょうか。

そこで役に立つのがTOEIC Programの診断的評価です。評価は本来、健康診断のように自分でも気づかないような部分を専門的な知見から教えてくれるものであり、テスト開発者の専門的で客観的な見地から、現在の実力を情報として得られることは非常に有意義です。この現在地を把握することは、例えば生成系AIの出力する英語との開きが見えるようになることでもあり、自分の目標に応じたやるべきことが見えてくるのです(資料6)。

(資料6)

生成系AIと英語教育(4): 英語テストはどうなるか?

- AIテクノロジーの活用による新たな英語学習のあり方
 - コミュニケーションの醍醐味がまずは経験でき、繰り返し経験できる
 - AIによる出力を参考に自分のものとして発信 → 自力の英語力との格差を次第に埋めていく・・・
 - これを繰り返すことによる、最終的な自力英語力の伸び
- 既存の英語アセスメントツール(TOEIC Programなど)は本来の評価役割へ
 - 英語アセスメントが生成AIの使用OKになるわけではなく、それは無意味
 - 到達度評価と診断的評価(診断的評価こそ評価の本懐、情動的価値)
 - 通常想定するよりもはるかに低い閾値から始めてよい

英語教育は質的な転換を遂げようとしています。AIというテクノロジーがインパクトを持つことで、英語教育も大きな影響を受ける分野の一つであることは間違いありません。英語という第二言語の取得で苦労を重ねてきた私たちだからこそ、生成系AIをうまく使いこなすことはチャンスになりますし、新しい英語教育と一緒に作っていきたいと思います。

■ 生成系AIを取り込んだ授業の展開

この英語教育の質的な転換により、漠然と世間一般で言われる英語力というものの定義の見直しも迫られていると思っています。

そこでPEPではいわゆる英語力を英語運用能力として定義できないかと考えています。この英語運用能力の基盤となるのが、先ほど紹介した新しい4技能「Research・Authoring・Collaboration・Output」です。

これらがいずれもテクノロジーやICTと密接に結びついたものであるということを踏まえると、英語運用能力は裸一貫で受験する試験のスコアではなくて、テクノロジーやICTを柔軟に活用して、必要な情報を英語で探してきたり取り込んだり表現をしたりする、そうしたスキルセットとして定義できるのではないのでしょうか。学生たちが社会に出て英語を使う際には、きっと便利なツールを活用するでしょうから、大学生のうちからリテラシーとして育成してあげることが必要になると考えています。

また、先ほどの生成系AIがチャンスになるという話にも重なりますが、クイーンズランド大学の天野達也先生らの研究で、非ネイティブ英語圏の研究者が今までいかに英語の負荷に耐えてきたのかということが計量的に測定され、数字で示されました。こうした研究者の苦労も生成系AIなどのテクノロジーによってかなり軽減されるのではないかと期待が持たれています(資料7)。

(資料7)

生成系AIを取り込んだ大学正課英語授業

- PEPが考える英語運用能力の定義
 - 新しい4技能: 調べる・まとめる・交流する・発信する
 - テクノロジーを活用し、学習者が必要な情報を英語で探し出して取り込み、適切な形式や表現を用いて英語で表現できること
- 参考: 非ネイティブの研究者の英語負荷は非常に高い

天野達也先生(クイーンズランド大学)らの研究より

続いてPEPのコマ構成ですが、2コマあります。プロジェクトの授業と、外部教育機関に委託した「聞く・読む・話す・書く」の4技能の授業です。これらを車の両輪と捉えています。ここで言いたいことは、一般的に生命科学や薬学といった自然科学分野の学部の多くは、1、2回生が終わると英語の授業は必修から外れてしまい、3、4回生となると任意の授業もないところもあるという状況には賛同をしかねるということです。高回生になるほど実は英語運用能力が必要なのではないのでしょうか。1、2回生で英語は終わりということも疑う必要が


あると思います。

本学の生命科学部と薬学部では、3回生の春学期まで英語教員が関わる授業を必修としています。さすがに3回生にもなると、英語教員の教えられる内容では学生たちの専門性に追いつかなくなります。そこで3回生以降の授業では専門科目の教員とのコラボレーションにて実施しています(資料8)。PEPでの最終発表においても、専門科目の教員と英語教員が関わり、英語教員は表現やコンテンツの深め方を、そして専門科目の教員は内容やコンテンツの筋道の評価・アドバイスをするなど分担して進めています。

(資料8)

3回生を対象とした授業「Junior Project 1」(JP1)

- 生命科学部・薬学部の3回生必修授業(春学期開講)
- 英語教員と専門科目の教員によるコラボレーション授業
- 語学授業ではなく専門科目として位置づけ
- 大規模会場で最終ポスター発表を実施(国際学会をイメージ)
- 優秀ポスター発表会はメタバース上で実施(NTT DOOR)
- 立命館大学によるプレスリリース記事



英語教員と専門教員がコラボした高回生の授業例を紹介します。生命科学部大学院生を対象にした「科学技術表現」では、応用化学、生物工学、生命情報学、生命科学の専門家とコーディネートのPEPメンバーがコラボして実施しています。薬学部も同様で、薬学部の専門家たちに協力してもらいPEPメンバーのコーディネートで授業を展開しています。

英語は英語の先生におまかせ、3回生以降は専門の先生が教えるという分業が常識の現在にあって、こうした教員の協働は大学の世界ではかなり特異な事例ですが、10年後、20年後の大学教育では当たり前になっていくと思います。英語の敷居がテクノロジーの発達によってどんどん低くなっていますし、英語はICTと同じようなインフラだと捉えて、英語教員も学部の教学の盛り上げに貢献していこうとしています。

■ 2回生で英語学習の歩みを止めない

先ほどは入学年度別のTOEIC L&Rスコア変遷について、入学時点の初期値が伸びているという話をしましたが、ここからは学年別のTOEIC L&Rスコアの推移について紹介します。

PEPでは大学から予算措置をもらい、1回生から3回生の冬まで、年2回ずつ計6回のTOEIC L&R IPテストを実施しています。そしてスコアの変遷を15年追ってみました。資料9の通りほぼ例外なく上がり続けています。

(資料9)

TOEIC L&R IPテストスコア変遷から見えること(後編)

● 3回生まで実施する…?

● 2018年度3回生平均(冬)

- 生命: 537.0
- 薬学: 513.3

● 2021年度3回生平均(夏)

- 生命: 562.5(△25)
- 薬学: 548.4(△35)

● 大学の英語教育、低回生で終わっているのか?

● TOEIC L&R IPテストというテストの程の良さ、汎用性、オンライン版を活かす

年度・学期	入学者数	1回生	2回生	3回生	4回生	5回生	6回生	7回生	8回生	9回生	10回生	11回生	12回生	13回生	14回生	15回生		
2018年度 (オンライン)	生命科学部	生命科学部	481.0	499.8	517.1	537.0	552.0	562.0	572.0	582.0	592.0	602.0	612.0	622.0	632.0	642.0	652.0	
		薬学部	481.0	499.8	517.1	537.0	552.0	562.0	572.0	582.0	592.0	602.0	612.0	622.0	632.0	642.0	652.0	
	薬学部	薬学部	481.0	499.8	517.1	537.0	552.0	562.0	572.0	582.0	592.0	602.0	612.0	622.0	632.0	642.0	652.0	
		生命科学部	481.0	499.8	517.1	537.0	552.0	562.0	572.0	582.0	592.0	602.0	612.0	622.0	632.0	642.0	652.0	
	2019年度 (オンライン)	生命科学部	生命科学部	481.0	499.8	517.1	537.0	552.0	562.0	572.0	582.0	592.0	602.0	612.0	622.0	632.0	642.0	652.0
			薬学部	481.0	499.8	517.1	537.0	552.0	562.0	572.0	582.0	592.0	602.0	612.0	622.0	632.0	642.0	652.0
	2020年度 (オンライン)	生命科学部	生命科学部	481.0	499.8	517.1	537.0	552.0	562.0	572.0	582.0	592.0	602.0	612.0	622.0	632.0	642.0	652.0
			薬学部	481.0	499.8	517.1	537.0	552.0	562.0	572.0	582.0	592.0	602.0	612.0	622.0	632.0	642.0	652.0
	2021年度 (オンライン)	生命科学部	生命科学部	481.0	499.8	517.1	537.0	552.0	562.0	572.0	582.0	592.0	602.0	612.0	622.0	632.0	642.0	652.0
			薬学部	481.0	499.8	517.1	537.0	552.0	562.0	572.0	582.0	592.0	602.0	612.0	622.0	632.0	642.0	652.0

最後に測る3回生の夏もしくは冬の最終到達スコアは平均550点ぐらいまでになります。これは何を意味するかと言うと、英語はやればやるほど、使えば使うほど伸びるのだから2回生で止めたらだめだ、ということです。

2回生の冬でスコア計測をやめると言う大学も多いと思いますが、3回生の夏や冬、もっと言えば4回生、大学院生でも、しっかりと英語教員が関わり、英語で表現・発信する機会が教育の中に組み込まれていれば、やればやるほどスコアは伸びるはずで。

TOEIC L&R IPテストのレベルとしても、民間の英語の資格試験としては適切だと感じています。オンライン方式だと不正行為が起こるのでとは心配しましたが、そんな暇もないくらい時間はあっという間に終わります。スコア傾向を見てもオンライン方式に全て切り替えた前後を比較しても急に点数が上がったということも一切なく、堅調に伸び続けています。

■ 英語教員が大学の未来を切り開く

18歳人口の低下を背景に、2050年を一つの区切りとしてほとんどの大学が危機的状況に直面するとされています。これを打破するために英語教員、英語教育がどのように貢献できるのか積極的に考えていきたいと思っています。

高校で探究型授業が指導要領に組み込まれている中、大学でもPEPのような授業に切り替えていくこともその一つだと考えます。探究型学習を経験した学生自身からも、既修言語として6年間学んできた英語を大学入学後はどう伸ばしてくれるのか、という期待を寄せられています。

では大学の教員側はどうかというと、このPEPの授業を受け持つ新任の先生は最初、怖気づいてしまうことがあります。「PEP Navi」というウェブ教材のリソースをまとめたサイトはありますが、教科書はありません。何のトピックが飛び出すかわからず、先生が答えを知らないという課題探究型学習の授業に尻込みしてしまうようです。ただ、1年経験してもらうとほとんどの教員がその授業の面白さに気付いてくれます。

英語教員や語学教員で博士号が求められるようになったのはこの10年弱ぐらいの話ですが、PEPに関わる本学の英語専任教員は全員が博士号を持っています。大学にとっては魅力的な英語プログラムを提供することは2050年を見据え、より重要になると考えています。

また、新しい4技能「Research・Authoring・Collaboration・Output」は、科学者であれば誰でも取り組むものでもあり、アカデミックリテラシーの基本スキルとも言えます。そう考えると、新しい4技能教育、ICT化の実践・研究のリーダーに英語教員がなれるはずだと考えています。

質疑応答

Q 大学全入時代で学力低下が見られる中、ICT活用は基礎学力の低い大学でも可能でしょうか。

A 発信型のICT活用は基礎学力問わず可能です。コミュニケーションですから、どのレベルであっても何かしらできることがあります。あるレベルまで到達してから発信というのは学習意欲を下げる恐れもあるため、“Hi, How are you”など今できるところから始めて、少しずつできることを増やしていけばよいと考えています。

実施するのであれば、フィードバックの質を担保するため、おそらく1クラスあたり15名ぐらいが最適だと感じています。

Q 具体的にICTを授業に導入するのは、情報工学に無縁な英語教員では難しいと感じます。チームで取り組めるような状況でない場合、一人の英語担当者としてできることがあるのでしょうか。

A 我々は4学部でチームを組んでいますし、一人の力では難しいかもしれません。PEPが成り立つのは英語教員だけのチームワークだけではなくて、専門の先生方や事務局の支援のおかげだと思っています。

Q AIが出力する英語は原文の意図を完璧に反映しているのでしょうか？

A 翻訳精度を確かめる方法として逆翻訳があります。例えば、日本語を英語で出力して、その英語を日本語に出力し直した時に、原文の日本語と出力された日本語が一緒であれば、英語にも原文の意図は反映されているとする方法です。ただし、生成系AIは決して文化を理解していませんし、意図を完璧に反映した翻訳なのかという点の問題はあります。それでも出力性能はすさまじいものがあります。実利的に考えて足りない部分は修正するという、たたき台として考えるならば十分だと考えます。

Q 生成系AIが台頭する中、学生に求められる英語力はどのくらいでしょうか。

A これは何点でも大丈夫です。

Q TOEIC® Speaking & Writing Testsの導入は検討されていますか。

A ぜひ導入したいですし、過去に一部の学生を対象に実施したこともありますが、受験率90%は達成できませんでした。予算的な部分も考慮しながら導入を検討したいです。

Q 3年次の英語の授業で、専門科目の教員と語学担当の教員間で足並みをそろえる工夫を教えてください。

A 学部全体が英語教育に対して責任を持つという姿勢を学部の執行部レベルで確認するということが大きかったと思います。語学のことは語学教員におまかせというタコツボ的状况から脱却しようという意識を共有することも大切です。なお、本学ではPEPを4学部だけでなく全学レベルでの導入を検討しています。もちろん人件費など費用はかかりますが、魅力ある大学の英語教育プログラムへの投資としては必要な経費だと考えています。

「英語集中プログラム」による英語力強化の 取り組みとTOEIC® L&Rの活用



長野県立大学

グローバルマネジメント学部 グローバルマネジメント学科 教授 坂 淳一 氏

■ グローバル教育を重視した2学部3学科

本学は、2018年に開学した新設の県立大学で、2学部3学科を設置しています。入学定員は、グローバルマネジメント学部グローバルマネジメント(GM)学科が170名、健康発達学部の食健康学科が30名、こども学科が40名、計240名です。4学年合わせても約1,000名という小規模な大学です。食健康学科では管理栄養士を養成しており、こども学科では幼稚園教諭一種免許と保育士資格の取得が可能です。いずれの資格についても、卒業生はほぼ100%取得しています。

本学の理念として「自ら考え、自ら学び、主体的に行動し、成長する機会を世界に求め、世界中のイノベーターと出会い、グローバルな視野で未来を切り拓き、地域を創生できるリーダーを育てます」と掲げており、学科に関係なくグローバルな視野を持った学生の育成を目指しています。こうしたことから、全学科の学生を対象に、TOEIC® Listening & Reading Test(以下、TOEIC L&R)団体特別受験制度(IP:Institutional Program、以下IPテスト)を大学の費用負担で受験させています。

■ 独自の英語集中プログラム

本学の英語集中プログラムは、1、2年次の全科目必修の科目群によるカリキュラムを指しています。なお、

3、4年次にも選択科目として英語科目はあります。

このプログラムの特徴は、「聞く・読む・話す・書く」の4技能融合型の授業展開と、2つの科目群、そしてNGSLの活用です(資料1)。

(資料1)

英語集中プログラムとは

- 1、2年次の必修12~14科目からなる英語カリキュラム
- “聞く・読む・話す・書く”の4技能融合型の授業展開
- Accuracy (英語を正確に運用する力) 養成科目群
- Fluency (ためらわずに英語を話す力) 養成科目群
- NGSL (New General Service List) を活用

<https://www.newgeneralservicelist.com/new-general-service-list>

それぞれを説明すると、まず「聞く・読む・話す・書く」の4技能融合型の授業展開ですが、初めから全科目において4技能をまとめて指導するのではなく、プログラム全体の中で4技能を少しずつ融合しながら、偏りなく指導するというものです。

続いて2つの科目群ですが、プログラム全体の科目構成はAccuracy科目群とFluency科目群という2本立てになっています。Accuracy科目群は日本人教員が担当する科目群で、英語を正確に運用する力を養成します。一方、Fluency科目群は英語をためらわずに話す力を養うことを目指しており、主に英語母語話者の教員が担当しています。

英語集中プログラムの3つ目の特徴としては、NGSL

の活用です。このNGSLというのはNew General Service Listの略称で、The Cambridge English Corpusに基づき、マイケル・ウェストあるいはチャールズ・ブラウン博士などの研究者たちによって作られた語彙リストです。

NGSLというワードでインターネット検索すると、NGSLのホームページが見つかります。このサイトでは、Wordlistsとして、NGSLのほかにも、New Academic Word ListやTOEIC Service Listという語彙リストも紹介しています。

英語集中プログラムではこのNGSLを使い、それが終わった学生はNew Academic Word Listに進みます。その後の3、4年次の英語科目ではTOEIC Service Listを活用しています。これらの語彙リストは無料で提供されており、ホームページ上でダウンロードすることも可能です。

こうしたWordlistsを使ってどのように勉強させているのか、英語集中プログラムの中身を紹介します(資料2)。

(資料2)

100分授業週2回 & 2系統カリキュラム						
英語集中プログラム (English Program for Global Mobility: EPGM)						
Accuracy 科目群			Fluency 科目群			
	GM	食健康	こども	GM	食健康	こども
1年次	1学期	Foundations of English I		Basic English Communication I		
	2学期	Foundations of English II		Basic English Communication II		
	3学期	Comprehensive English I		Academic English Communication I		
	4学期	Comprehensive English II		Academic English Communication II		
2年次	Comprehensive English III			Academic English Communication III		
	2学期	海外プログラム		Career English A		Career English B
	3学期	Career English I	Career English A	Academic English for Global Mobility I	Career English B	
	4学期	Career English II	Career English A	Academic English for Global Mobility II	Career English B	

本学は4学期制で、英語集中プログラムでは100分の授業が週2回あります。Fluency科目群は主に英語母語話者が教員ですので、全て英語で行われています。Accuracy科目群では基本的に日本語をベースとしており、時々英語も交えながら行われています。そしてAccuracy科目の2年次にはCareer Englishという科目があり、ここでTOEIC L&Rの指導を行います。

NGSLは基本的にFluency科目群で用いています。具体的にはリストをだいたい400語～700語ごとに5つ

のレベルに分けた上で、入学時にまず全員の語彙レベルテストを行います。新入生はその結果を基に各レベルに振り分けられて、1学期間、各自学習をすることになります。

その英語の学習の仕方については、「Student Handbook」という80ページほどの冊子にまとめ、新入生全員に配布しています。この中に、単語学習アプリやオンライン学習ツールの問題集なども用意されており、自分で一生懸命学んで力をつけてもらいます。Fluency科目群の2年次1学期までは、NGSLのレベル試験を毎学期受けて語彙力を高めます。そこで合格点を取ると成績の10%になるという仕組みです。

本学では、全学のアドミッション・ポリシーに「英語集中プログラムと海外プログラムを通して、『読む・聞く・書く・話す』の4技能を体系的・実践的に身につけ、グローバル社会で活躍したい者」とうたい、全学科で英語力を重視していますが、TOEIC L&Rの実施以外にも、いくつかの取り組みがあります。

GM学科では、プログラム最後となる2年次にTOEIC L&Rの指導に加えて、基礎ビジネス英語を教えたり、トレードショーというものを実施しています。

トレードショーは、2年生がグループに分かれて架空のプロジェクトやサービス、製品などを作り、他の学生たちに向けてプレゼンテーションを行うイベントです。

発表の出番ではない学生たちはトレードショーの観客という設定で、商品やサービスについて一生懸命英語で質問します。それに対して売り手側の学生も英語で説明します。教員も観客として参加可能で質問もできます。学生たちが考えたビジネスアイデアの促進を通して、参加者一同で英語力とコミュニケーション力を駆使する機会となっています。

これはFluency科目群の2年次4学期の科目の中で実施していますが、参加する教員も英語で挨拶あるいは講評などを行いますし、進行もFluency科目群の英語母語話者の教員が英語で行いますので、基本的に全て英語で行うイベントになっています。

また、食健康学科では、栄養英語という栄養学で使

うような英語をまとめたテキストなどを使って指導をしたり、食に関する英語を使った授業も行ったりしています。こども学科では、幼児教育に関する英語の論文などを扱ったり、幼保英語の指導なども行っています。どの学科の学生にも関心を持って英語の学習をしてもらえるように工夫しています。

次に、先ほどアドミッション・ポリシー内で少し触れた海外プログラムについてです。これは基本的には専門教育科目という位置付けで、実際に海外に行き、現地で英語を学んだり、専門の学びを深めたりするプログラムです。

研修先は現在、アメリカ、イギリス、ニュージーランド、スウェーデン、フィンランド、フィリピンの6カ国です。海外プログラムの具体的な内容は、研修先機関による英語のレッスンが主に午前中にあります。研修先によってその内容は異なりますが、いずれの研修先であっても全て英語で行われ、なかなかハードな内容です。その他には、現地の様々な施設を訪れて英語で質疑などをするSite Visitもあります。研修先となる施設は学科によって異なり、GM学科であれば地元の企業へ、食健康学科であれば病院で給食の状況などを視察したり、こども学科は保育施設を見学に行ったりしています。また、期間内に英語でのプレゼンテーションや、英語を使って調理実習を体験する機会もあります。

■ 英語成果の指標として TOEIC® L&R IPテスト実施

TOEIC L&Rの話題に戻ると、本学では入学直後の4月、その約1年後の1年次末、さらに約1年後の2年次末という計3回、TOEIC L&R IPテスト(オンライン)を実施しています(資料3)。試験時の不正を防ぐという観点から、各自個人のパソコンを持ってきてもらい、大学で試験監督の立ち会いの下、受験させています。

(資料3)

TOEIC L&R IPテストの実施時期

	第1学期	第2学期	第3学期	第4学期
1年次	第1回			第2回
2年次		海外プログラム		第3回

本学がTOEIC L&Rを活用している理由として、TOEIC L&Rが英語集中プログラムを中心とする英語教育の成果の指標として位置付けられていることが大きいです。これは中期計画の中にも盛り込まれているもので、中期計画では「学生の英語力について、2年次修了時までに全学生がTOEIC L&R 600点以上になることを最低到達目標とするとともに、さらなる向上を支援し、平均点700点以上を目指す」としています。このミッションを実現させるために開学以来努力してきたのです。

入学から2年次までの3回の受験ということについても、中期計画において「入学時、1年修了時、2年次修了時において、英語の外部試験を実施して学修に対するモチベーションを高めるとともに、その習熟度を測定し、結果を検証しつつ大学全体の結果について公表する」と定めています。

その他の理由として、1年次末に受けるTOEIC L&Rのスコアを2年次に進む際のクラス分けの指標として活用しています。1年次は3段階、2年次では2段階のレベル別に分け、計10クラスで英語の授業を実施しています。

食健康学科とこども学科の資格については、ほぼ100%がいずれかの資格を取得して卒業していくと冒頭で紹介しましたが、資格を取得できる制度になっていないGM学部では、TOEIC L&Rを有力な資格として強く推奨しています。

第1期生から第4期生までのスコア変遷を資料4にまとめました。入学時点では全学科の平均スコアは418～508点でしたが、2年間の英語集中プログラムを終え

るタイミングでは545～629点にまで伸びています。確実にスコアアップしてはいますが、目指す600点の達成率100%にはまだ遠い状況です。

また、第1期生と第2期生を比べると2年次修了時点の平均スコアが560点から545点へと下がってしまっていますが、この第2期生というのが2019年度の入学で、コロナ禍により急遽オンラインでの授業実施になったり、海外プログラムが中止になったりと英語学習には厳しい状況があった世代です。この第2期生とその後の第3期生や第4期生を比較すると平均点や600点達成率は回復してきていますが、第3期生からTOEIC L&R IPテストのオンライン方式を導入したことも影響していると思います。

(資料4)

	第1期生	第2期生	第3期生	第4期生
入学時平均点	420	418	508	468
	↓	↓	↓	↓
2年修了時平均点	560	545	612	629
増加	140	127	104	161
600点達成率	46.0%	37.4%	55.7%	56.7%

■ 教育効果を向上させるために

このオンライン方式の導入は、教育効果向上の取り組みの一つになったと感じています。オンライン方式はリスニングセクションとリーディングセクションそれぞれがUNIT ONEとUNIT TWOに分かれていて、UNIT ONEで正答率が低かった受験者には、UNIT TWOで難易度の低い問題が出題されます。マークシート方式とオンライン方式は同じ難易度とされており、私もマークシート方式とオンライン方式の両方を受験したことがありますが、その最高点は5点しか変わらなかったため両者の相似性は相当高く保たれているようです。

ただ、英語が得意ではない受験生に限ると、マーク

シート方式の場合、難しい問題がたくさん印刷された問題冊子と2時間向き合うことになるため、十分に実力を発揮することなく試験終了ということも少なくないようです。これがオンライン方式となると、UNIT TWOで難易度が調整されることに加え、1時間で済むということが要因だと思いますが、試験に最後まで集中して向き合う様子が見られますし、結果的にもスコアがまんべんなく分布していることにつながったのではないかと思います。

本来、新型コロナウイルス感染症の対策としてやむを得ずオンライン方式にした経緯はありますが、幅広い学生の本当の実力を知るにはオンライン方式の方がより有効だという印象を持っています。

その他の教育効果向上の取り組みは、TOEIC L&Rについてほとんど知らない新入生も多いため、1年次最初のTOEIC L&R IPテストを実施した後で、IIBCからオンライン説明会を行ってもらい、学生たちに受験する意義や就職活動、大学卒業後も役立つことなどへの理解を深めさせています。また、希望者には受験料自己負担にはなりますが、マークシート方式も受験できる機会を年2回設けています。

さらに、先ほど紹介した日本人教員が担当するAccuracy科目群の2年次4学期のCareer English系の科目では、TOEIC L&Rのスコアを成績に活用しています(資料5)。

GM学部ではCareer English IIの成績100点のうち30%をTOEIC L&Rのスコアとしています。具体的な換算としては700点取れば30点満点、600点で24点です。基本的には50点ごとに2～3点刻みで低くなり、例えば650点だと27点ということになります。ただ300点未満は一律3点、未受験は0点です。健康発達学部ではTOEIC L&Rのスコアが成績に占める割合が少し下がり、成績100点のうち20%です。700点で20点満点、600点で16点と50点ごとに2点刻みで、300点未満は一律2点となっています。

(資料5)

D. 2年次4学期科目におけるTOEIC L&Rスコアの成績評価への活用

- グローバルマネジメント学部
2年生4学期科目 Career English II の成績100点のうち30%
⇒ 700点で30点満点、600点で24点（80%、成績 A相当）で、
あとは50点ごとに2～3点刻み
- 健康発達学部
2年生4学期科目 Career English A の成績100点のうち20%
⇒ 700点で20点満点、600点で16点（80%、成績 A相当）
あとは50点ごとに2点刻み

OB・OGによる英語関連の就職活動のエピソード紹介も教育効果向上につながっています。例えば、就職した時にTOEIC L&Rのスコアが役に立ったことや、仕事でも英語を使っているなど、英語学習のモチベーションにもつながるような内容で非常に好評のようです。

他にも、英語教育部会の英語教員の会議で様々な分析報告をして、今後の指導について検討していますし、非常勤講師を含めたクラス担当者へのスコアのフィードバックは、今後の指導に生かしてもらうために必ず行っています。

教育効果向上の取り組みの最後として、非常勤講師へ授業内容の説明文書を配布し、説明会を行っています。授業内容説明文書というのは、各科目のマニュアルのようなもので、各科目の性質と役割、行うべき学習活動、活動で扱うべき内容・テーマ、共通教科書や教科書例といったものが記載されており、非常勤講師が担当する全科目分を作成しています。ただ配るだけでなく、年に1、2回、あるいは必要に応じて対面やオンライン会議による説明会も実施し、文書内容を把握してもらっています。

この説明会は、授業改革のための組織的な取り組みを兼ねた情報交換会という意味合いもあります。非常勤講師はFluency科目で4名、Accuracy科目で3名しかいませんので、各チームリーダーとメールでの綿密なやり取りを1年中続けています。

■ モチベーションを高める今後の施策

今後の取り組みとしては、2年次修了時点で、全学生がTOEIC L&R 600点達成という目標設定が高いのではという意見もあるため、2024年度から新中期計画になるタイミングに向けて見直しをする予定です。高得点者の表彰制度についても、他大学の事例も参考にしながら導入し、学生のモチベーション向上に資するために、あらゆることを試していきたいと考えています。

質疑応答

Q TOEIC L&R IPテストの受験率向上のための施策はなにかありますか。

A 3回の受験機会はいずれもほぼ100%の受験率を確保しています。初回となる大学入学直後は、全員が集まりやすいオリエンテーション期間で実施しています。1年次末の受験は、2年次のクラス分けにスコアが必要というアナウンスをすることで受けてもらっています。これらのタイミングで未受験となるのはごく少数ですので、受験するまでIPテスト担当教員から個別に受験機会の案内などを行います。2年次末の受験は、紹介したようにスコアが成績の30%、20%に入ってくるため、学生は単位取得のために積極的に受験しています。

Q 2年次のトレードショー発表では、英語の通常授業の中で発表に至るまでの課題解決型学習の準備も行われていますか？

A 4学期科目の20～30%くらいの時間は割いて行っています。12月末の発表が近づくにつれて準備のウェイトが重くなっていく進め方です。

Q IPテスト(オンライン)の受験体制を教えてください。

A 学生たちを、30名程度のグループに分け、特定の時間にパソコンを持参し、試験会場へ来るように案内して受験させています。英語専任教員が教室の監督を務め、ログインなどのインストラクションをしつつ、不正がないかどうかを巡視しています。

Q オンライン方式だとスコアが高めに出る受験者もいる印象です。本人のモチベーション維持には使えますが、英語力を上手に測ることができるのでしょうか？

A 英語が得意ではない学生の場合、マークシート方式は試験時間の長さから、集中力が続かず、途中で投げ出してしまう傾向があるのですが、オンライン方式だと試験時間をフルに使い、力を発揮するように感じています。現在は基本的にオンライン方式で試験実施しており、その伸びを同じ条件で見るという観点からも、引き続きオンライン方式を実施していきたいと思えます。

ヤマト運輸における 自己研鑽の取り組みのご紹介



ヤマト運輸株式会社

人材開発部 営業・グローバル人材担当チーム マネージャー 片見 香里 氏

■ なぜヤマト運輸で英語が必要か 海外との接点の増加とキャリア成長支援

なぜ宅急便の会社で英語が必要なのかと疑問に思われるかもしれません。まず、その背景からお話しします。弊社は1919年に創業し、2019年に100周年を迎えました。そのタイミングで次の100年も引き続きご愛顧いただくため、中長期の経営グランドデザインを策定し、3つの事業構造改革を掲げました。1つ目が宅急便のデジタルトランスフォーメーションで、宅急便を新たにブラッシュアップしていく取り組み。2つ目がECのエコシステムの確立。3つ目が法人向けの物流事業の強化を挙げています。

この法人向けセクションは、宅急便の会社として法人のお客さまの物流領域に対し、ソリューションの提供を考え、そして実践をしていくという部門になります。宅急便の売上げが全体を占める割合が大きい弊社にとっては、この法人向けセクションは新たなチャレンジでもあり、同時にどういった人を育成していくのが課題になっていました。

法人向けの物流事業を少し紹介すると、例えばフォワーディングという国際物流領域や、いわゆるビジネス小荷物のスモールパーセルに近い商品、eコマースでいうと主に海外から来る荷物を扱います。そういった越境ECと呼ばれる国際の小口の貨物に関しても、法人向け物流セクションが担当しています。そうした環境の中で、外資系企業とお取引をしたり、もしくはそも

そも海外からの荷物であったりと、海外との接点が増えてきています。

紹介した3つの事業構造改革を踏まえ、人事としても人材マネジメント方針を定め、自律的・自発的にキャリア成長を望む社員を会社として後押しする取り組みを進めています。具体的には、英語に限らず業務に関連する資格の取得などを会社としてサポートしています(資料1)。

(資料1)

はじめに(なぜヤマトで英語か?)

- 中長期の経営のグランドデザインとして策定した「YAMATO Next 100」において、3つの事業構造改革の取組の一つとして“法人向け物流事業の強化”を実践
- 人事として“人材マネジメント方針”を定め、自律的・自発的にキャリア成長を望む社員を後押し。英語に関わらず業務に関連する資格取得などを会社としてサポート

■ TOEIC® L&Rを営業・グローバル統括部門で導入 営業・グローバル統括各部門で必達目標を設定

弊社は2021年4月にヤマト運輸ならびにグループ7社を統合し、ワンヤマト体制のもと活動を始めています。そうした中で、グローバルのお客さまに対するサービスを今後さらに展開するため、まずは現在の実力を測ろうと2022年1月にTOEIC® Listening & Reading

Test(以下、TOEIC L&R)団体特別受験制度(IP: Institutional Program、以下IPテスト)を導入しました。

初回は営業・グローバル統括部門の一部を対象とし、279名が受験しました。直近となる2023年8月の実施では同部門全てに対象を広げ、638名が受験しています。現在の具体的な実施体制としては、各部門で定められた目標スコア達成を目指して、3か月に一度の頻度で受験しています。

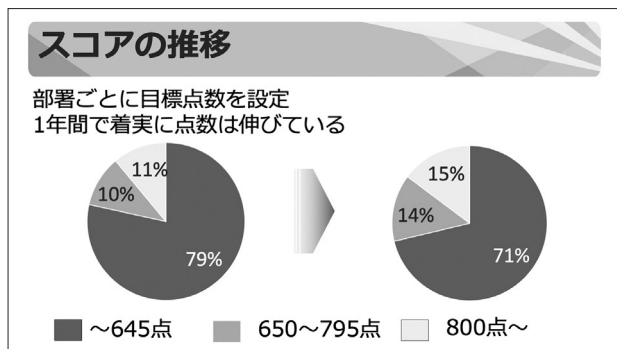
この目標スコアは、営業・グローバル統括部門内にある各部署での役割を定めた職務定義書の中に「この部署で働くにはTOEIC L&Rで何点相当の英語力が必要」などと指標として示されています。各部門の目標スコアは必達とし、さらに上を目指す人向けに最終到達点として800点を設定しています。この800点を超えた人は3か月に一度のIPテストの受験は卒業となります。

■ スコア推移と成果

弊社はもともとドメスティックな事業を主体としていることもあり、スタート時点のTOEIC L&Rの平均点が454点、中央値で410点と低めでした。

個人で見ると最高点980点から最低点で約90点と非常に幅がある状況でした。その1年後の結果では、平均点が473点、中央値が465点と中央値は50点以上アップしました(資料2)。

(資料2)

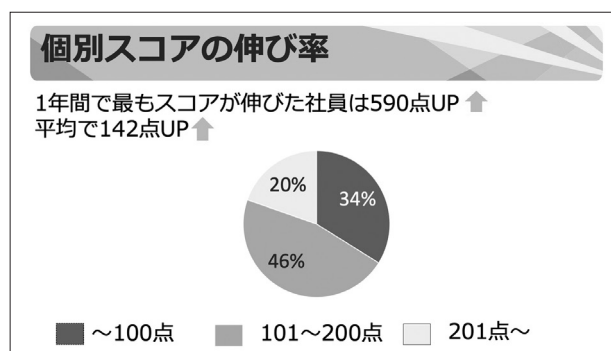


約1年間での個別のスコアの伸び率は平均142点アップでした。最も伸びた社員は590点アップで、最終

到達点の800点に達して卒業生になっています。

この資料3でも分かるように201点以上アップした社員は全体の20%を占めていますが、この中には300点以上アップした人が19名もいます。内訳は300点以上400点未満のアップが14名、400点以上500点未満のアップが4名、そして前述の590点アップが1名です。ちなみに、このうち6名が800点以上のスコアを取得しています。

(資料3)



こうした300点以上もスコアアップした社員たちは実際に仕事で英語を使うのかということ、最もスコアが伸びた社員は海外に関わる業務をしており、TOEIC L&Rの学習をきっかけに英語を非常に使うようになったそうです。

他にも、営業職で、現地法人と接点のある仕事を受託できるように積極的に働きかけたという社員もいました。また業務上、英語を使わない社員も中にはいますが、全体的に努力が身になり、熱心に取り組まれていると感じています。

■ スコアの向上につながった3つの要因

なぜこれほどの点数アップにつながったかということ、大きくは3つの要因が考えられます。

まずは部門トップからのメッセージが非常に強かったという、言わば経営陣の熱量が大きかったことが挙げられます。他には補助教材を取り入れてスキマ学習をねらったのが2つ目。3つ目が社内で開催した独自

の英語学習プログラムです。

それぞれについて説明します。まず部門トップ自らが率先して、社員が英語に触れる時間を多く作りました。例えば、社内イントラに関しては全て日英併記とされています。毎月のメール配信も日英併記とすることで社員が英語に触れる機会を増やしています。そこでは新しいチャレンジを奨励するような内容を回数を重ねて伝えています。

また、役員の方の取り組みとして、今期のポイントを共有する期首のキックオフミーティングなどは日本語版と英語版の両方で実施しています。

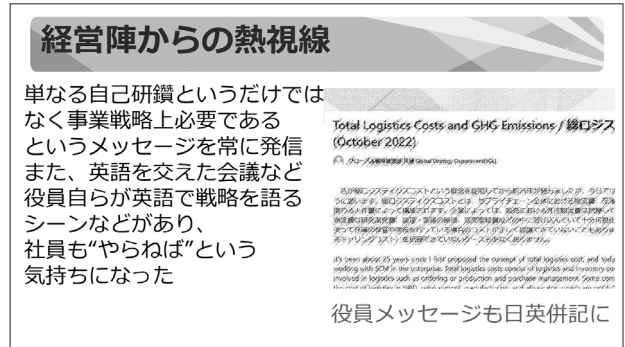
ワンヤマト体制となる以前は、役員の冒頭挨拶だけが英語で、その後のパートは日本語で話しつつ、同時通訳を入れるといったこともありました。現在は英語の原稿を用意して、自身の言葉で発言をしてもらっています。

もともと英語になじみのない役員も含めて、事前に練習をしてミーティングに臨んでいます。全役員が英語で自分の考えを述べるという姿勢は、部下にとって新鮮に映ったと思っています。

他には、先述した職務定義書に各部署で求められる英語のレベルをTOEIC L&Rのスコアで示し、中途採用の場面でも外部の方々に対し、その職務定義書の内容に合った英語のレベルを求めることで、全体的な意識の醸成につなげています。英語に直接は関係ありませんが、全体的に研修の機会を増やして、勉強を習慣化させたというもあります。

自己研鑽では、継続力やモチベーションアップは多くの企業で課題だと思いますが、弊社は部門トップの率先によってその下に追随する方々のモチベーションアップにつなげることができたと考えています(資料4)。

(資料4)



2つ目の要因である補助教材によるスキマ学習については、TOEIC L&R対策があるアプリタイプの教材を希望者に導入しています。希望者はチームを組み、1週間の学習のコマ数をチーム対抗戦で競うなどゲーム感覚で学んでいるのがよかったです。

スキマ学習だと、営業職であれば移動の最中や通勤時間なども学習が可能ですが、例えばマネージャーなどの役位が上の社員が昼休みに取り組んでいる姿を見る機会があったりすると、話題になったりしますよね。そうしてお互いに刺激し合う環境も自然と生まれてきています。

弊社ではあくまでもTOEIC L&Rの受験自体は、英語力の現状把握のためであり、業務中に実施しています。ただし、受験に向けた勉強というプロセスについては、希望者には会社からの金銭的な補助も含めて支援はしているものの、業務の都合などもあるため各自のペースで取り組んでもらっています。

このように勉強は強制ではないため心理的な負担にもならず、一方では互いに刺激し合う部分もありつつというバランスが功を奏して、伸びる人はとても伸びるという結果につながったと思っています(資料5)。

(資料5)

補助教材によるスキマ学習

アプリタイプのTOEIC® TEST対策を希望者に対し導入し、チーム戦で学習時間を競ったスキマ学習用の教材のため強制ではなかったが、おのずとお互いが学習の進捗状況を雑談の中で共有し合うようになり、同僚間でよい影響を与えることができた



最後の要因は、社内での英語プログラムの実施です。これは参加希望者を募り、昼休みに実施しているもので、講師は人事も含めて社員が務めます。ちなみに、講師を務める社員はその時間、業務中扱いで休憩は別の時間で取るといった運用です。

なぜ社員が講師を務めたかという点、先述したスコアの範囲からも分かる通り、英語がそれほど得意ではない人も多くいる状況であるため、中学レベルの英語から振り返る必要があります。そのような中で教える側も中学英語レベルの内容なので教えやすく、社員でも対応できたことが理由の一つです。教わる側としても社員が講師なので、親近感をもってプログラムに臨むことができたのではないのでしょうか。

また、弊社はTOEIC L&Rで高スコアを取ることがゴールではなく、身に付けた英語をツールとして新たなビジネスを作ることを最終目標としています。英語プログラムではこの最終目標を意識して、実務に沿った内容を盛り込み、物流業界で必要な例文や表現を交えながら取り組んだこともよかったと思っています。

英語プログラムには延べ100名以上が参加し、英語に興味を持つ機会になりましたし、参加者で最もスコアが伸びた人は390点アップと、結果にもつながっているようです(資料6)。

(資料6)

社内で英語学習プログラム実施

社内で昼休みを利用してTOEIC® L&R講座と中学英語振り返り講座を行った
延べ100名以上が参加し、英語に興味をもってもらうことができた(講座参加者で最もスコアが伸びた社員は390点UP) ↑



IPテストによる3カ月に1回の計測と学習による副産物として、業務上で推奨している英語関連以外の資格についても平均より高い水準で合格することができています。

また、勉強の習慣化により、受け身の研修に留まらず、自主的に資格取得に取り組む社員も増えており、リスニングやアップスキリングに繋がっているように感じています。これはまさに人材マネジメント方針で掲げている「自律的・自発的なキャリア成長を社員それぞれが行動する」という実現にも少しずつ近づいているのかと思います。

■ 使う英語へとさらに昇華させるために

今後の取り組みとして、英語ができたとしても仕事に直結するとは限りません。そのため英語の学びを通して、社員の学びの習慣化やチャレンジする精神を引き続き養いつつ、使う英語へと昇華させていきたいと思っています。

例えば、先述したドメスティックな宅急便領域から法人のお客様に対する国際物流といった分野への転換・拡大を進める上で、世界的な企業や外資系企業の入札案件はさらに注力していかなければなりません。

こうした入札案件では、英語が堪能な人に任せきりになる場合が多いため、弊社ではそうした人に限らず、プレゼンテーション役を務められるように、人事としても英語の原稿作成や練習を手伝ったりしています。学習したものを実際に使ってみて、褒められたり案

件が獲得できたりという成功体験があって初めてさらにその次につながるのではないのでしょうか。

その他、弊社施設を見学いただく際に英語でお客様のアテンドをするといった場面でも同様に、英語がそれほど堪能でなくとも案内役を務めることを応援する取り組みを進めています。

また、3カ月に1回の受験という頻度は多いという意見もあるかもしれませんが、継続した運用と学習を実現するには、このくらいが適切だと感じています。1年1回程度の機会だと忘れてしまったり、それほど勉強しなかったりという傾向が見られたため、学習効果が出やすい現状の頻度で継続していきたいと思っています。

最後に、英語学習をきっかけに他の学習も意欲的にチャレンジする社員が増えてきているように感じています。弊社としても、社員の自発的な学習を奨励し、可能な限りサポートしていけるように、英語に限らず業務知識やデジタルスキルなど幅広い分野を自学習得できるような制度の構築に今後とも取り組んでいきたいと思っています。

質疑応答

Q 留学経験などがなくても英語が身に付く方法がありますか？

A 先述した外資系企業の入札案件でプレゼンテーションを実際に担当した社員は、海外に行ったことがありませんでしたが、プレゼンテーションの練習をサポートしたり、簡単な表現に置き換えてでもいいので、自分の言葉で発表するといったアドバイスをしたことで、英語ができない人でもまず一步目を踏み出せます。もしくは現地法人があるような企業であれば海外赴任も英語を身に付ける機会になります。なるべく英語に関わることができる機会の提供が有効だと思います。

Q AIによる機械翻訳ツールが台頭する中で、学生たちにとって英語を学ぶ意義を教えてください。

A 機械翻訳ツールは参考程度に使うのであれば非常に有効だと思いますが、自動翻訳による英文が場面に合ったふさわしい表現なのかどうか確認する必要があるのではないのでしょうか。ただし、ビジネスで英語を使う場面では、お互いが英語母語話者でないことも多く、そこではいかに文法的に正しい英語が使えるかよりも、どんどんトライして、どんどん慣れていく方が重要だと思っていますので、トライを重ねる補助ツールとしては有効に使ってよいかと思います。

Q TOEIC L&Rは学習がインプットに偏りがちですが、何をすればアウトプットの教育効果があると思いますか？

A 紹介したプレゼンテーションの練習も一つですが、弊社の場合、海外現地法人と積極的にミーティングをしてもらうことでアウトプットの力を高めています。完璧な英語を話さないといけないと思っている人は少なくないと思いますが、まずは単語だけでもいいから英語を話すことに慣れてもらうことが大切だと思います。

Q 英語プログラムは希望者参加とのことですが、研修の周知や参加者増で工夫されたことを教えてください。

A 希望者がいればなるべくサポートしたい、そういった観点から始めているため、参加した方がリピーターになるケースが多い状況です。周知に関しては事前にアンケートなどを取って内容も含めニーズとおおよその参加規模を把握して、受け入れ体制をつくっています。

Q TOEIC L&Rのスコアが同じでも実際にビジネスで英語を使って仕事ができる人できない人がいると思います。そこへのフォローなどがあれば教えてください。

A 学校の英語はできるのに、実際にビジネスなどで活用できてない方の内、TOEIC L&Rのスコアが高い人の場合は完璧な英語でないと恥ずかしいとか、不安だという気持ちが大きく影響しているのではないのでしょうか。そういった方々には本人が発話をする機会、恥ずかしさを払拭するような練習の機会を人事が設けるようにしています。

発行月：2023年11月

発 行：一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC)

東京

〒100-0014 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル
TEL 050-1790-7422

名古屋

〒460-0003 愛知県名古屋市中区錦2-4-3 錦パークビル
TEL 050-1790-7419

大阪

〒541-0059 大阪府大阪市中央区博労町3-6-1 御堂筋エスジービル
TEL 050-1790-7417

公式サイト

<https://www.iibc-global.org>

ETS, the ETS logo, PROPELL, TOEIC and TOEIC BRIDGE are registered trademarks of ETS, Princeton, New Jersey, USA, and used in Japan under license. Portions are copyrighted by ETS and used with permission.

IIBC あなたが世界をつなぐ
あなたと世界をつなぐ

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
The Institute for International Business Communication

